

---

建築学会大会研究懇談会「街角の居場所の創出・実践者を迎えて」

2005.09.01(木) / 近畿大学

司会：森一彦

副司会：西田徹

主旨説明：鈴木毅 松原茂樹

主題解説：白根良子 滋野淳治 赤井直 笹倉エミ子 小松尚 三浦研

まとめ：橋弘志

本研究懇談会は、2005年9月1日13:00～17:00に開催された。司会は森一彦(大阪市立大学)、副司会は西田徹(武庫川女子大学)。主旨説明後に4名の実践者による具体的事例に則した主題解説と研究者2名による研究の立場からの主題解説、討論という構成で進められた。さらに会場との質疑応答及び全体のまとめが行われた。本研究懇談会は『建築雑誌』2005年5月号における座談会企画「公共の場の構築・住民の手による場所づくりの試みから見えてくるもの」の展開として、その意義と可能性・課題について議論したものである。

#### 主旨説明

鈴木毅(大阪大学)

「自分たちでこういう場所をつくりました。」それは、世の中になかったから、専門家がつくってくれなかったからである。これらの場所のつくられ方を調べていくと、専門家によるものではなく、市民の自発的な意志で、主がちゃんと居て、手探りで、制度を避けてつくったものが多い。また、場所の質としては、思い思いに居られ、他者との社会的関係が生まれ、多様な活動があることが分かってきた。こういう場所は全国に多く生まれつつある。これらの実践に対して建築計画の専門家は何を学ぶべきか、地域にどんな場所をつくるべきか、計画としてどのように作り出すのかを議論したい。

松原茂樹(大阪大学)

実践者による4事例について、その特徴をスライドと資料を用いて説明を行った。

#### 主題解説(以下主要な発言の抜粋)

親と子の談話室「とぼす」の実践:白根良子さん(親と子の談話室「とぼす」主宰)

「とぼす」の中にいて、まず自分が落ち着く。自分が落ち着かなければ、よそから来た方も落ち着かないのではないかなと思います。

20人ではちょっとまかないきれない、自分の人件費もでません。ですから、自分のためにつくったというか、自分の仕事としてつくりました。仕事っていうのは、私は人に仕えるものだと思っていますし、地域のためになれば、それをやることで自分が楽しい人生を送ればとても幸せかなと思います。

うちは、お客さんがたくさんいると入って来ない人がいらっしやいます。大勢いるところには来たくないっていうお客さんがいらっしやいます。お客さんばかりと言ったらおかしいですけど、大勢だと「さっきは「とぼす」らしくなかったね」とか言って、そっと誰もいない時に入ってくるっていう方が多いのです。

そして、お客様の方が「とぼす」だけじゃなくて、必要な場所をそれぞれ持っていっしやいます。その中の1つとして「とぼす」を選んでくださるという方がいらっしやるのですね。だから「ここは誰にも教えたくない場所なんだ」というのが「とぼす」らしいかなと思います。それで、一人でゆっくりしたいという居場所として「とぼす」をみなさんが位置づけていらっしやいます。

#### 「佐倉市ヤングプラザ」の実践：滋野淳治(佐倉市企画政策部財政課)

じゃあどうしていこうかと、色々考えたのですが、まずは、青少年が集まって来られる居場所ということに特化してやっていこうと考えました。この中に、気持ちとしては色々な機能、青少年が喜んでくれるようなものとか、情報提供としては、たとえば、図書館機能とか、色々なものを組み入れていきたいな、という気持ちもありましたが、まずは、気軽に来られる場所ということを中心に整備を考えていました。

最初から我々が整備するにあたって、色々な機能、完璧なものとして提供するというのではなくて、類似の施設がなかったものですから、まずオープンして、一緒に考えて、状況を見ながらまた整備を進めていけばいいのではないかなというような姿勢で動いていきました。

「ヤングプラ」の中で、気軽な相談に対応する相談員はいないのですが、子どもたちが事務室に来て、職員とかその補佐員と自由に話しをします。「今日こんなことあったよ」とか、あと「誰々がむかつく」とかそんな感じです。それが業務だというふうにはちょっと言えないかもしれませんがね。

#### 千里ニュータウン「ひがしまち街角広場」の実践：赤井直(「ひがしまち街角広場」代表)

私は、15、6年前から人間歳をとりますと、ほんとにまちで、そのまちで、歳をとった人がどういふふうに過ごしていくのがいいかなってことを考えるようになりました。その時に、ニュータウンの中にはそういう「何となく過ごせる」、「みんなが何となくぶらっと集まって喋れる」、「ゆっくり過ごせる」という場所はありませんでした。

で、「何をしよう」と言って、「まず地域交流、コミュニケーションの場所が欲しいんだから、お茶ぐらい飲めるようにしましょうよ」ということになって、お茶を飲むのはどうしたらいいか、「じゃあ、素人ができることだから、紅茶かコーヒーぐらいしかないねえ、日本茶も出しましょう」…それぐらい何も決まっていませんでした。もう、今から考えたら恐ろしいようなかたちでオープンしました。さっきの滋野さんじゃないですけど、歩きながら考えるじゃなくて、走りながら考えて毎日過ごして、オープンしてからも毎日そういうことの連続です。明日はどうしたらいいか、今、次の時間はどうしたらいいか、そういうことの連続ですとまいりましたが、…(略)…

集会所ってというのは、一般に集会所ってというのは目的がきちりしていて、申し込んでおかないと使えないですね。「街角広場」っていうところは便利なところで、「今日の夕方これに使いたいねんけど、貸して欲しい」って飛び込んで来た人にもすぐに貸せるような状況ですので、そういう利用もあります。ですから、飛び込み利用っていうのでしょうか、そういうこともたくさんあると思います。

「宅老所ひだまり」の実践：笹倉エミ子（「宅老所ひだまり」代表）

何か色々そんなことがありまして、その母に友だちをつくりたいと思って、その母の一人の生きづらさを抱えた人の要求がそこにあったから行動が始まりました。別に主があって、こうしたいからつくったのではなくて、そこに要求があって…（略）…で、そういう特別生きづらさを抱えた人が幸せになれる場所はどうしたものだろうということで、必要に迫られて作りました。

だから、ものが言えなくても、字が書けなくても、いいものってというのは、一番癒されるのは、自然と環境のしつらえではないでしょうか。だから、目に映るもの、手芸が好きな人には手芸のもの置くとか、音楽だとか、うちには有線も入っていますが、色々そういう生きづらさを抱えた人が癒される、その空間をどうしてつくっていったらいいかっていうことで、実は始めました。介護保険がない状態で始めました。

で、介護保険が始まってきますと、土建屋さんやら、色々この失業の時代にお年寄りが商売のターゲットになるって感じで、どんどん介護保険を使う事業所が増えてきています。質の問題もピンからキリまであるのですけれど、必要悪のようなかたちで施設がいっぱい増えています。

高齢者の生活環境の視点から：三浦研（大阪市立大学）

4人の実践者の方々の話を伺って思ったことのひとつは、レイ・オールデンバーグ(Ray Oldenburg)のサードプレイス(third place)のことです。これは聞きかじりですが、あのオールデンバーグのサードプレイスに非常に似ていると思いました。それは、職場と自宅以外の第三の場所で、近くにあり、気安く行けるところ、それから固定的な関係がある訳ですが、それだけではなくて、いつも新しい関係を作る場所なのです。それから、オールデンバーグが言っていて面白いことは、安く飲食ができることです。今日紹介されたものの中では、佐倉のケースはわかりませんでした。いずれも水場がきちんと計画されています。それから、多様なコミュニケーションがあることで、一番大事なことは、今日来られている実践者の方々が、それを繋いでいく、関係性を繋いでいく人だということです。

今までの建築計画がやってきたこと（私のような若い者が言うのはなんなのですが）は、やや制度に基づいた箱モノを対象にしてきたのかなと思います。自分の反省も含めて言うと、こういう箱モノというのは、人を集団として扱うことは何となくできたのですが、そこでの関係性を繋いでいって群れになるまでには消化できなかったような気がしています。つまり、4つの事例はいずれもコミュニケーションとか、人と人との関係性を繋いでいくということが非常に力強くて、その中にはハードもあるのですが、やはり、そこを繋いでいく人の力というのが非常に大きくて、それが、今日ここで伺っていて、かなり強く我々

を感動させてくれているのだと思います。

高齢者施設について、今、私自身、続かなくてもいい制度を実は少し考えはじめています。続かない仕組みでもいいのではないかと。こけたら、こけようよと。むしろ、ハードとソフトを定食みたいにしてセットで出すのではなくて、たとえば、考えないといけないとか、使いこなさないといけないとか、組み立てないといけない、そういうふうな思考を要求するような制度というか、仕組みというものになった方が質の高い高齢者の居場所が出来るのではないかなと思います。

建築計画とまちづくりの視点から：小松尚さん(名古屋大学)

私自身が着目したい点として考えているのは、次の2つです。恐らく今日の話聞いて、みなさんが感じていることもこの2つだと思います。一つ目は、市民が自発的にたち上げて運営していることです。市民による公共の場の構築、ちょっとかたく書きましたが、建築計画や都市計画の分野では、参加という問題が近年ずっと議論されています。今日紹介している場は、それをかなり超えたところで始めていて、既に実現しています。そういう意味で、既に紹介があった、日常性とか柔軟性、しつらえ、主の役割、もてなしというような点が実際に特徴としてあるのではないのでしょうか。このあたりのあり方が、制度的に規定されて固定化されてしまうこれまでの公共施設と大きな違いがあるといえます。二つ目は、既存のストックといわれるものを活用されていることです。「街角広場」は空き店舗ですし、それから「ひだまり」も住宅を使っています。民間ストックといってもいいかもしれませんが、それが活用されています。

ただし、自発的にたち上げて運営されていることに注目するならば、やはりビルディングタイプという計画論の延長では捉えきれないように思います。我々なりに正当に評価をして、きちんと提示する必要があると思います。ですからどちらかと言えば、差異よりも共通点に着目した方がいいのではないかと思います。

それから、継続性という観点から、今の主が、たとえば何らかの理由で変わった時に今と同じような質のものができるのかどうかという問題は、これから色々問われていくところではないかと思います。なにも、無理して続けなくてもいいのではないかという話になるのか、それとも何か仕組みを支える制度を作ることを含めて、それを支える方策を考えて、先程三浦さんがお話しされたようなところへいくのかというあたりがおそらくポイントなのだろうと思います。

それから、私もすごく悩んでいることがあるのですが、どんな言葉でこの場所を表現したらいいのかということです。今回のこの懇談会での名称は「街角の居場所」ですが、私は、午前中のオーガナイズドセッションでは、私は「地域交流の場」と言っていました。言葉にこだわる訳じゃないのですが、近いうちにいい名前が見つかるといいと思います。

江上徹(九州産業大学)さんから、なぜ「街角の居場所」が増えているのか、必要性があるのか、もし量的に多ければ「制度化」の方向へいくのだろうか。笹倉さんの施設に入れる人は限られている、多数の人が取り残されているのではないだろうかという指摘を受けた。

まとめ(以下主要な発言の抜粋)

橋弘志(実践女子大学)

街角の居場所から4つの価値が読み取れます。一つ目は「場所の価値」です。そこに作られている具体的な実践の場所としての価値。それから、そこで行われている「実践の取り組みの価値」というのがあります。それから、まさにその取り組みの中で色々つくり上げられている関係、人と人との関係、人と環境との関係、そういう「関係の価値」というのがあると言えます。そして、それをつくり出している「人の価値」というのがあるのではないかなと思います。

あるいは、環境と人との相互浸透の関係という言い方もすることがありますが、いい環境をつくれればそこでいい生活ができる、生活の質があがるということではなくて、そこで人が常に関わり続けて、どんどん環境を変容させていくという関係の中ではじめて生み出されていく、そういう場所の価値というものを改めて思いました。

人と目的を目指して、その目的に向かって何かをつくるというような作り方ではなくて、常にその都度状況対応的にというのでしょうか、常にそこに人のニーズや気持ちを探っていきながらつくり上げられていく、そういう今までの施設とはちょっと違う、先に目的があってつくられるのではなくて、とにかく歩き始めて、走り始めて、常に探りながら進めていくというようなタイプの取り組みの仕方、そこに大きな価値があると思います。それは、制度という話がありました。もし、現在の制度が、そういうような状況対応的なものを許容するようなものではなくて、むしろ、本質的に変化させない、ある固定した枠にはめるような制度であるとすると、生き生きとした公共的な空間が生まれづらいのではないのかという気がします。

その中で、空間の役割というのはデイサービスであるとか、居場所という目的をつくるための空間ではありませんし、それからそこでコミュニケーションさせるための手段としての空間でもなくて、むしろ、人の様々な行為を促す手がかりがあったり、きっかけがあったりとか、使っていくうちに、色々使いこなしていくような、何かそういう可能性を持っている、ある意味では人と人、あるいは人と環境を繋いでいく媒介のような、そういう関係、環境になってのではないのでしょうか。

それはある意味で、公共的な空間の中で、その人が非常に公共的な存在であるということを感じました。公共的な存在というのは、officialな存在ではなくて、色んな人に対して開かれた存在であるということ、それが極めて個人的な思いから発している、非常に自分が「こういうことをしたい」というような思いが他人に対して開かれているがゆえに、人に対して開かれています。環境と人という時に、自分が人で、周りが環境という捉え方もありますが、まさに自分自身が環境となって他の人にどう働きかけていくか、

どうもてなしていくかというような、非常に大事な役割を果たしているのではないのでしょうか。それがあ  
る目的を達成するというような生き方ではなくて、人に対してこう開いて、人に対してどうもてなすか、  
あるいはその人をどうケアしたいか、色々な思いがあると思いますが、そういうものが最初にあるという、  
そういう生き方なのではないのでしょうか。

単に制度を使ってやっていけばそういうキーパーソンが育つのか、そういうことではなくて、やはりそ  
の中で、いい環境の中で、ここにいらっしゃるようないい公共的存在のキーパーソンの人に触れていく中  
で、少しずつそういう人が実は育っていくのではないだろうかという気がしました。そういう意味で、本  
日の公共的な空間というのは単にそこに居心地がいいということだけではなくて、そこに  
いる人が、自分もなんかそういうケアをすとか、そういう関係を紡ぐような人になりたいというような、  
そういう価値観に共鳴していくような、…（略）…何かこう学んでいくような場にもなり得るのではな  
いのかというようなことで、またそれが新しく場所を生み出していき、そこで関係を紡ぎ出していきよう  
な中のいい循環になっていけば非常にいいのではないのでしょうか。

本報告書の作成は田中康裕（大阪大学）の協力を得て行いました。